

ポピュラー音楽学会準備会の発足

はしづめだいさぶろう
橋爪大三郎

ポピュラー音楽とアカデミズム。こりゃあまた、なんてミスマッチな取り合わせだ。でも大まじめに、そのふたつをドッキングさせようと夢を追っている人びとがいる。そして先頃ついに、学会を旗揚げした。

その名も「日本ポピュラー音楽学会」。実はまだその準備会だけれど、第1回の大会が11月5日、落葉散りゆく上野の森、東京芸術大学で開かれた。参加者は予想をだいぶ上回って、全国から約60人。午前中に「カラオケ論序説」など3本の自由発表、午後はテーマセッション「著作権とポピュラー音楽」、そのあとひき続いて総会、懇親会と、充実した内容の一日だった。

たまたまこの会の事務局を仰せつかった私、思入れもひとかたならぬものがある。

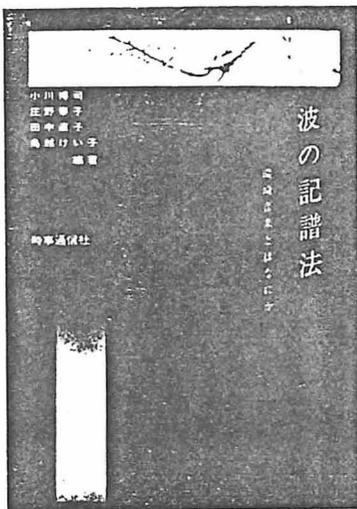
もつと広くこの会の存在が知られ、関心をもつ全国の同志(ただただファンの方でもいいんです)に参加いただければ幸いです。

ポピュラー音楽なんて、肩ひじ張らずに音楽に聞くもの。大人はわかっちゃくれないう、多少甘えた反抗心と、リーゼントになつたポマードの匂い。団塊(戦後ベビーブーム)の世代の私が、中学早々にラジオのヒットパレードを欠かさず聴きはじめて頃、プレスリーはまだ現役で、チャートが上がったり下がったりしていたし、そのあとビートルズなんていう、変わった4人組も出てきたなあ。だからまさか、ポップスが、れつきとした学問になるなんて思ってもみなかった。でも、こんなふうに考えてもいい。

人間のいるところなぜか、必ず音楽がある。そして、民衆(多くの人びと)の愛好する音楽を通して、きつと社会が見えてくる。音がしたり、声が出たりするのは自然現象かもしれないが、それが音楽になり歌になるのは、文化そのもの。人間の社会的な営みの産物だ。これを研究しない手はないだろう。

私の専門は、社会学だが、この分野にはマックス・ウェーバーという大先達がいる。彼は、西欧近代を特徴づける合理化の精神が、音楽の領域にも脈打っていることを実証しようと、大著『音楽社会学』に着手したのだ。しかし未完に終わり、このプランは受け継ぐ者もないまま野ざらしに。ところが最近クラシック音楽もただの「制度」ではないかととらえ、それを成立させた歴史的・社会的文脈を掘り下げようという、若手の学者が大勢出てきてにぎやかになった。活字文化は先細りで、若者は音楽に走っている。昔にくらべれば、人びとの音楽の素養も、情報量も、マーケティングの規模も、桁違いに豊かに大きくなったのである。

——ということに、ちつとも気がついてい



なかつたその昔、正確に言うとい九八二三年の春、私あてに一通の案内状が届いた。差し出し人は畏友、小川博司氏。昨年『音楽する社会』(勤草書房)を出版した社会学者である。案内状によると、「日常生活と音楽研究会(日音研)」という会合を、月一回のペースで

始めるらしい。今までの音楽(学)の枠に収まらず、かと言って、社会学の守備範囲からももれていたあたりを、これから研究するのだという。ほかに呼びかけ人は、鳥越けい子、田中直子、庄野泰子のみなさん。なんだかキヤンディーズみたいな三人組。面白そうではないか。ムクムクと好奇心が動いて、出かけて行つた。思えばこれが、今度の学会結成にいたる、いちばん最初のきっかけではなかったかと思う。

この研究会はたいへん盛会で、それに私の知らないことばかりで、実に愉快だった。だからなるべく足を運んだ。マリィ・シェーファアの『世界の調律』(平凡社)を翻訳していた鳥越さんたちが、サウンドスケープの思想を紹介してくれた。そのほかにも、ブライアン・イーノと環境音楽。ジョン・ブラッキングら音楽人類学の新潮流。ホフスタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッチャー』。ジャマイカン・レゲエの現在。CFとイメージ・ソングの戦略。戦後日本ポップス史。ジョン・ケージの思想。東南アジアの流行歌事情。などなどといった豊富な話題が、いろんな角度から報告されたのである。やがて大阪に移つ

た小川さんは、関西にも「日音研」を組織し、今日に至っている。

ここから世に問われた成果も多い。小川さん、鳥越さんたちの『波の記譜法』(時事通信社)は、環境音楽についての、日本で最初の書物だ。また、鳥越さんたちのグループは、神田をフィールドにサウンドスケープの調査をしたり、横浜・新鶴屋橋の音響装置を手がけたりしている。

そんな頃、細川周平氏が留学先のイタリアから帰国した。

海外ではひと足さきに、ポピュラー音楽研究者のネットワークが進んでいた。一九八一年には、国際ポピュラー音楽学会(IASPM)が結成される。細川さんは、早くからこの学会に関わり、会員として活躍していた。IASPMは現在会員約六百人。隔年で世界大会を開いて、これまでにアムステルダム、レッキョ・デミリア(伊)、モントリオール、アクラ(ガーナ)と続き、5回目の今年は革命二百年に沸くパリ。細川さんは第2回からずっと参加している。

この学会の、日本支部を作ろうよという話

